

『グリム童話』初版時における 「ヘンゼルとグレーテル」の世界

相馬沙奎

はじめに

1. 「ヘンゼルとグレーテル」における初版と現代版の相違点
2. ヘンゼルの行動について
3. グレーテルの精神的成長
4. グレーテルはエレクトラ・コンプレックスなのか？

おわりに：つまり『グリム童話』とは

はじめに

絵本という形で私たちも親しんできた『グリム童話』の典型的結末は「そして幸せに暮らしました」の文で締めくくられており、いかにも夢のある幸せなおとぎ話であるかのような印象を受けるが、実はそれだけではなかった。

これより初版の『グリム童話』について触れていくが、その前に『グリム童話』とは何かについて説明する¹。

『グリム童話』はグリム兄弟（兄：ヤーコプ・グリム〈1785-1863〉、弟：ヴィルヘルム・グリム〈1786-1859〉）によって出版された童話集である。

『グリム童話』の中で著名な童話は、『白雪姫』、『シンデレラ（灰かぶり）』、『いばら姫』、そして『ヘンゼルとグレーテル』などが挙げられる。

『グリム童話』は 1812 年～1857 年の間で、第 7 版まで出版を繰

¹ 本稿における「ヘンゼルとグレーテル」初版とは由良弥生著『大人もぞっとする初版『グリム童話』』（三笠書房、2002 年）に依拠した。

り返しているのだが、その出版が繰り返された理由は以下の通りである。

『グリム童話』とあるから、童話の創作者はグリム兄弟である、と考えがちである。

しかし、『グリム童話』はグリム兄弟が創作したものではない。当時伝わっていたドイツの民話や伝説を集めたものが『グリム童話』である。そして、集めた民話や伝説をグリム兄弟は原典に忠実に再現した。

忠実に再現した理由は、当時、『グリム童話』ができる前にも民話を元にした童話が存在していたことにある。しかし、それらの作家たちは、民話を単なる素材としか考えておらず、元になった民話に自分たちの好きなように創作を加えてしまっていた。そのため、民話本来の形ではなくなってしまうので、グリム兄弟は原典に忠実に再現することが重要だと捉えていたようである。『グリム童話』はグリム兄弟が集めた民話に基づいたものであるものの、集めた民話には何も創作は加えず、原典に忠実に再現している、ということである。

しかし、「忠実に」再現してしまったため、残酷な仕打ちや男女の性愛などの表現もそのまま再現され、「子供には読ませられない」と批判が出てしまった。

それにより、加筆修正のために版が重ねられ、版を重ねるごとに子供向けの内容に変化していった²。

ただ、このように書くとグリム兄弟が、子供が残酷な仕打ちや男女の性愛などを読むことにまで気が回っていなかったように思えるだろうが、そうではない。

グリム兄弟は、そのことも分かっていた上で再現していたのである。彼らは、そういった世の中のマイナス面を隠したくなかつ

² 高木昌文・高木万里子『グリム兄弟：生涯・作品・時代』（青土社、1999年）138～142頁。高橋健二『グリム兄弟』（新潮社、2000年）102～104頁。竹原威滋『グリム童話と近代メルヘン』（三弥井書店、2006年）20～21頁。

たようなのだ。子供用の、優しいだけの物語ではなく、そういった面を含んだ人間の世界を、童話を通して知って欲しかったようなのである³。

私たちが知っている『グリム童話』にそういった表現が見られないのは、版を重ねられ加筆修正された状態のものであるからだ。

つまり、初版に近いほど不道德な表現が見受けられる。そこで本編では初版の「ヘンゼルとグレーテル」について触れていく。というわけは、よく知られた童話であると同時に、後にも述べるが「ヘンゼルとグレーテル」は初版からほとんど変更がない童話でもある。

その、ほとんど変更がない童話であるのに、それでも変更された点とはどこだったのか。変更が少ないということはすなわち、先程述べたグリム兄弟が知って欲しかった人間の世界が、そのまま残っているのではないか、そう考えたからである。

そのうえでこの「人間での世界」の主人公である、ヘンゼルとグレーテルの精神面について触れていく。グリム兄弟が知って欲しかった「人間の世界」のなかで、ヘンゼルとグレーテルは何を思っていたのか。ヘンゼルとグレーテルの精神面を通して、グリムの伝える「人間の世界」を見ていく。

1. 「ヘンゼルとグレーテル」における 初版と現代版の相違点

残酷な表現や男女の性愛の表現が修正された結果、話の展開や結末が変わった童話もある(『白雪姫』や『シンデレラ(灰かぶり)』など)。

しかし、『ヘンゼルとグレーテル』に関しては、話の構造は(私たちのよく知る)絵本も初版もそれほど違いはない。というのも、

³ 小澤俊夫『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』(朝日新聞出版、1992年)67～70頁。

何度も繰り返される出版の中で、『ヘンゼルとグレーテル』には、ほとんど変更はなかった⁴。「ほとんど」であるから、変更点はある。(性的描写に近いものや、子を捨てようと言われたときの父親の内面の描写など細かいものもあるが) 目に見えて分かりやすい部分として、ヘンゼルとグレーテルの母親に関して、大きく変更された。

初版では実母だったのだが、第4版以降から継母へと変わったのである。

なぜ変更されたのかといえば、作中でヘンゼルとグレーテルを森の中に置き去りにすることを言い出すのは絵本でも初版でも変わることなく母親である。しかし、初版の場合、この母親はヘンゼルとグレーテルの実母ということになる。そのため、実母が「子を捨てよう」というのは教育上どうなのか、という指摘があり、継母に変更になった。由良弥生著『大人もぞっとする初版『グリム童話』』にあるように⁵「子を捨てよう」と言いだした理由は、貧しいため食費を減らそうと考えてのことであった。

貧しいのは、家の稼ぎの個人的な問題ではなく、この時代、中世のヨーロッパでは食費を減らすために子、あるいは老人を捨てるのはどの家庭でもありうることであった。

ヘンゼルとグレーテルが森に置き去りにされ、家に帰れなくなってから魔女の家（お菓子の家）を見つけてからの展開は、初版から大きな違いはない。

ただ、グレーテルが魔女をかまどで焼き殺すシーンには、初版に微妙な違いが見られる。だがその前に、兄であるヘンゼルの行動について触れておきたい。

⁴ 由良・前掲の46～47頁にも記されている。

⁵ 由良・前掲47頁11行目-48頁7行目。

2. ヘンゼルの行動について

まず主人公の1人、ヘンゼルに触れてみたいと思う。

ヘンゼルのとる行動は、初版でも現在でも違いは特にはないのだが、気になることがある。

ヘンゼルが小石やパンくず（パンくずは鳥に食べられてしまったが）を撒いたのは、家への帰り道をわかるようにするため、とても知恵のある印象を受けるが、少し不思議である。

ヘンゼルのこの行動は、これから捨てられる、と分かっていたからこそその行動である。捨てられると分かっていたなら、家に帰ることのできる知恵を働かせたところで、無駄だとどうして思わなかったのだろうか。

ひとつ考えられるのは、ヘンゼルも親に依存した部分がどこかにあったからなのではないか。捨てられたくないと思っていたからこそ、家に帰ることのできる知恵しか働かなかったのではないだろうか。

ヘンゼルにもこの後再度触れるが、ここからは、グレーテルが魔女を焼き殺すシーンの初版との違いと併せて、グレーテルの精神的成長の部分について触れたい。グレーテルの精神的成長の部分は物語の山場である魔女を焼き殺すシーンに象徴的に表れているからである。この物語において魔女がヘンゼルとグレーテルの敵として登場し、その敵である魔女を焼き殺すシーンでグレーテルの精神的成長が描かれるということは、何らかの意味を持っていると考えられるからだ⁶。

⁶ 鈴木晶『メルヘンの深層』（講談社、1991年）84～87頁。清水正『謎とき「ヘンゼルとグレーテル」：グリム童話の深層と再構築』（D文学研究会、1995年）55～59頁。

3. グレーテルの精神的成長

この物語において魔女は、絵本でも初版でもグレーテルによってかまどで焼き殺されるという結末を迎える。

話の流れは変わらないのだが、グレーテルの内面に違いが見られる。

絵本では、食べられそうになるヘンゼルを助けたい一心から、魔女をかまどで焼き殺すのだが、初版では「あること」に気付いている。

以下がその「あること」である。

母さん。母さんの顔だ。醜くて、口うるさくて、そして、私たち二人を捨てた、あの女だ！

自分が生きのびるために、私たち二人を森に捨てさせた、あの身勝手な女だ。

見てごらん。この魔女は、母さんにそっくりじゃないか⁷。

グレーテルは魔女をかまどで焼き殺す際、「魔女は母である」と思っている。そしてそのうえで、魔女をかまどで焼き殺している。

このシーンは子（グレーテル）の精神的成長を表していると考えられる。

本当に魔女が母であったのか、それとも単なるグレーテルの思い込みであったのかは不明だが、少なくともグレーテルにとって、魔女は「母」だったのである。つまりは、母を焼き殺したのだ。

そしてそのことは、母（魔女）に支配されていた子（グレーテル）が親を精神的に乗り越え、自立していくことを示しているとも捉えることができる。

実際、魔女を焼き殺す（あるいは魔女に出会う）前と魔女を焼き殺した後のグレーテルに、以下のような性格の違いが見られる。

⁷ 由良・前掲 38 頁 2-5 行目より引用。

魔女を焼き殺す(魔女に出会う)前のグレーテル

「もうおしまいだわ。母さんは私たちを捨てようとしてるんだわ！」

「シッ！静かに。グレーテル！」

ヘンゼルは泣き声をあげそうになった妹を急いでなだめた。

「大丈夫だ。なんとかするから。だから、泣くんじゃない」⁸

魔女を焼き殺した後(宝物を見つけたとき)のグレーテル

「こいつはすごいや」

「もらっていきましょうよ」

すぐにグレーテルが言った。ヘンゼルもうなずくと、ポケットに詰められるだけ詰めた。

グレーテルは、魔女のタンスから袋を取り出し、もっとたくさんの宝石をグューグュー詰め込んだ。

「そんなにたくさん？」

「そりゃそうよ。ここを出て家に帰っても、何もお宝はありやしないんだから、持てるだけ持って行かなくちゃ。父さんはからつきし意気地がなくて、お金なんか持ってやしないんだから」⁹

このように、魔女を焼き殺す（魔女に出会う）前のグレーテルは、ヘンゼルに頼りきりの、ヘンゼルがいないと一人ではなにもできないような、泣いてばかりの弱々しい性格であった。当然、グレーテルにとってヘンゼルの存在は必要不可欠である。

しかし、魔女を焼き殺した後のグレーテルは、少々強すぎとも思える、気の強い性格に変わっている。それだけではない。グレーテルは、家に帰ったときのことを考え、より多く宝石を持ち帰ろうとしている。それも、ヘンゼルに言われたからそうしたので

⁸ 由良・前掲 17 頁 14 行目－18 頁 2 行目より引用。

⁹ 由良・前掲 42 頁 5-13 行目より引用。

はなく、自分で考え、自分から動くようになっている点に、性格の違いが見受けられる。以前までのグレーテルであれば、より多くどころか、ヘンゼルが宝石を持ち帰ろうと言い出さない限り、おそらく宝石を持ち帰らなかったであろう。

グレーテルは、母を精神的に乗り越えたことで、ヘンゼルに頼りきりで守られるばかりの弱い自分を乗り越えて、自立したといえる。

そしてヘンゼルの話に戻るが、精神的成長がわかりやすいグレーテルに対し、ヘンゼルにはあまり精神的成長の部分がみられない。

これは、ヘンゼルが魔女によって閉じ込められていたせいであると考えられる。食べられるために生かされていたとはいえ、ヘンゼルはずっと牢屋の中で過ごす。魔女によって働かされていたグレーテルに対し、この間、ヘンゼルの中（内面）の時間は止まっているのと同じなのだ。つまり、ヘンゼルに精神的成長の部分がみられないのは、その成長の機会（つまりは、親を乗り越える機会）を与えられなかったからではないかと思われる¹⁰。

4. グレーテルはエレクトラ・コンプレックスなのか？

魔女を焼き殺したことで自立したように見えるグレーテルだが、彼女の行動にはエレクトラ・コンプレックスが関係しているように考えられる。

エレクトラ・コンプレックスとはいわゆるエディプス・コンプレックスの逆である。エディプス・コンプレックスとは、父親を憎み母親を愛す状態をさす¹¹。

つまりこの逆であるエレクトラ・コンプレックスは、母親を憎

¹⁰ 清水・前掲 69～83 頁。

¹¹ 妙木浩之『エディプス・コンプレックス論争 性をめぐる精神分析史』（講談社選書メチエ、2002 年）5 頁、83～84 頁。

み父親を愛す状態であり、グレーテルがそうなのではないかと考えられる。

なぜなら、事実にはせよ思い込みにせよ、グレーテルは彼女にとっての母である魔女を激しく憎悪し（そのおかげで兄を救えたのだが）焼き殺すまでに至った。

しかし受動的にとはいえ自分たちを捨てた父親には憎しみの感情は向けてはいないように見られる。むしろ多くの宝物を持ち帰ったのは父親を気遣ったの行動のように見える。もしも両親共に憎いのであれば、家に帰らずその宝物でヘンゼルと二人で生きていこうと考えるだろう。

以上の行動から、グレーテルはエレクトラ・コンプレックスである可能性が考えられる。

つまり『グリム童話』とは

初版の『グリム童話』は、単なるおとぎ話というだけではない。そして『ヘンゼルとグレーテル』は、ヘンゼルとグレーテルが意地悪な母親に理不尽な目（森に置き去り）にあわされる裏には、当時のヨーロッパの飢饉による子捨ての現実、置き去りにされた後のヘンゼルとグレーテルの精神面（親に依存している内面や、自らの力のみで困難を乗り越えようとする部分）について描かれている。

ただ物語を読むだけでもいいのだが、そういった部分についても注目しながら読んでみると、今まで知っていた童話の印象が、また別の印象へと変わるかもしれない。